

人類と地球の未来を創るため
日本が一步を踏み出す時が来た

著者 **山際大志郎**



私はクジラの調査研究のため、2回南氷洋を訪れており、言葉にできないほどの自然の厳しさを身にしみて知っている。そんな環境下で、日本は20年以上継続してクジラ調査を行ってきた。そこから得られた正確な科学データは、科学者からは正しい評価を受けている。ところが国際捕鯨委員会 (IWC) では科学の正しさは全く通用せず、西洋諸国のエゴが世界のパワーゲーム宜しく、まかり通ってしまう。

政治家になって目を世界に広げてみると、現代世界の冷徹な現実が見えてくる。大航海時代から500年、世界は広く西洋文明化し、白人がそれを統治する枠組みが固定化してしまった。そして多くの国は西洋文明の圧倒的な力を消化できないどころか、消化不良を起こしていることにすら気付かない。実は私達が直面している問題の本質はここにあるのだと思う。

21世紀のこれからを考えると、一様に西洋文明化した世界で良いのだろうか？ 私はそうは思わない。ではどうすれば良いか？ その答えは西洋文明を唯一消化できた日本人が見つけなければ、他には誰も見つけられないだろう。

答えを見つけるためにはまず国際社会の現実を知る必要がある。IWCはまさに国際社会を映す鏡である。IWCの現実を一人でも多くの日本人に知ってもらいたい、そして問題の本質をつかみ私達の進むべき道を考え、行動してもらいたい。それがこの本を上梓する目的である。

序章 IWCは国際社会の現実を映し出す鏡

第1部 調査捕鯨の正しい知識

- 第1章 環境保護運動とクジラ：なぜクジラが環境保護のシンボルなのか／穢れた「聖域」、南氷洋サンクチュアリ／環境保護団体の本当の目的は金もうけ／他
- 第2章 機能停止に陥ったIWC—本当の使命とは：自ら条約違反を続けるIWC／「捕鯨国」アメリカのダブルスタンダード／クジラ外交に全力を尽くす／他
- 第3章 調査捕鯨はなぜ必要か—誤解と偏見があふれている：調査捕鯨は条約で認められた正しい権利／目視調査の実際／調査で何がわかったか／他

第2部 クジラの生物学

- 第4章 驚くべきクジラの大進化—完璧な流線形のボディ：プロポーション／首／耳（耳介・耳殻）／脚／皮下脂肪（脂皮）／鼻孔
- 第5章 不思議がいっぱい、クジラの身体：眼／耳／声／鼻腔／舌／脳／ヒゲ／歯／胃／腸／腎臓／飲（うね）／体表

第3部 クジラと人類の共生をめざせ

- 第6章 クジラが救う食糧危機：やってくる動物性タンパク質不足の時代／これ以上家畜は増やせない／クジラやアザラシの間引きは避けられない
- 第7章 調査の妨害を排除せよ—やまざわ議員大いに叫ぶ：テロを防ぐために海上保安庁巡視船の派遣を／第166回国会 外務委員会 第15号
- 第8章 捕鯨存続の礎となった自民党捕鯨議員連盟：全政党がそろって捕鯨支持／功を奏した議員外交／「セントキッツ・ネーヴィス宣言」採択される／他

終章 闘え！ くじら人=日本人!!

資料 国際捕鯨取締条約(ICRW条約)／海洋航海の安全に対する不法な行為の防止に関する条約 (SUA条約)／セントキッツ・ネーヴィス宣言

ご注文の際は、この注文書に必要事項をご記入の上、最寄りの書店にお申込み下さい。お客様のご都合により、直接当社宛にご注文の場合は、FAXまたは郵便にてお送り下さい。また当社ホームページからもご注文いただけます。

ISBN978-4-425-98181-6 C1036 ¥1800E

闘え！くじら人—捕鯨問題でわかる国際社会—
定価1890円 (5%税込) 発送費340円

ご住所・お名前(〒)

部

(株)成山堂書店 〒160-0012 東京都新宿区南元町4-51 成山堂ビル Tel: 03-3357-5861 / Fax: 03-3357-5867
E-mail: publisher@seizando.co.jp ホームページ: http://www.seizando.co.jp 振替口座: 00170-4-78174



衆議院議員

山際大志郎 著



欧米諸国に牛耳られている国際社会、
捕鯨問題はまさにそれを映し出す鏡となっている。
深刻な食料危機・環境破壊がさしせまる今、
日本人が新しい世界秩序を構築するカギを握っている！
世界が、地球が日本の力を欲している。今こそ出番だ！
覚醒よ、日本人!! 闘え、くじら人!!

四六判 220頁 / 定価1890円 (5%税込) 発送費340円
成山堂書店 発行 ご注文専用アドレス order@seizando.co.jp



国際問題には オール・ジャパンで取り組める体制作りを

元環境大臣
衆議院議員

小池百合子

著者の山際大志郎衆議院議員は、自民党若手の論客、ホープである。歌舞伎役者のような顔立ちから見かけは優男だが、内に秘める志はその名の通り大きい。それは、地球最大の生物である鯨を巡る世界の論争に強い憤りを抱く著者の思いからもおわかりいただけるだろう。

山際氏は国際捕鯨委員会（IWC）の現場で、いかに日本が国際世論を動かすような国家戦略が必要かを痛感された。私も環境大臣の際に、地球温暖化対策などの国際会議に出席したが、せっかく素晴らしい省エネ技術や環境力を有しながら、日本が世界の舞台回しを果たしきれない現実にもどかしさを感じたものである。

マクロの世界戦略に長けた欧州勢や、独自路線をとりながらも、最終的には主導権確保を狙うアメリカ、成長目覚ましい中国やインドなどの新興国の論理…。国際社会は、各国のエゴがぶつかり、渦巻いているのが現実の姿である。関係省庁の縦割り調整に莫大なエネルギーを費やしては、日本が世界をリードするなど遠い話である。国民体育大会でヘトヘトになり、肝心のオリンピックで力が出せないようなものだ。

鯨問題は、担当はあくまで水産庁と外務省であり、環境省ではないことになっている。捕鯨反対の最右翼のオーストラリアはそのことを熟知しており、日豪環境大臣会議でも捕鯨問題が俎上に乗せられることはない。論理構成から、各国の説得など、オール・ジャパンで取り組める体制作りが不可欠だ。山際氏は捕鯨問題を通じて、日本のあるべき姿を訴えている。

現場と政治の経験が 見事に凝縮されたバランスのいい本

アルピニスト **野口 健**



この一冊で、鯨に対する心のわだかまりが全て解けた。そして、山の世界も海の世界も同じような問題を抱えている事も知った。

私は登山家だが、私が最も大切にしているのは現場の感覚である。ただ、環境問題を考えるとき理念や理想論に偏り易く、何かと話題が0か100か、保護か開発か、といった極論になってしまう。この本は、そういった極論を科学的かつ現場での経験を持って論破しているところが、実に気持ちいい。

私はアメリカで生まれ、中・高とヨーロッパで過ごしたが、彼らの日本バッシングはある種の趣味だ。確かに欧米流の考え方は常に進んでいるし学ぶべき点も多い。しかし、何でもかんでも「欧米がしているから」という時代でもない。国と国との政治的なパワーゲームで、我々の食卓から鯨が消えていったかと思うと、少し悲しい。

ノルウェーやイヌイットそして日本人も鯨を獲ってきたが、伝統的な食文化の中でバランスを保ちながら鯨を獲ってきた。自らの歴史を顧みず、責任転嫁するのは大間違いだと思う。

この本には政界の野口健（笑）こと山際大志郎さんの現場と政治の経験が見事に凝縮されたバランスのいいものになっている。

是非、ご一読頂きたい。

国際社会における 日本の役割を指し示した猛書

東京大学大学院農学
生命科学科教授

林 良博



山際大志郎氏は、衆議院議員であると同時に、わたしの研究室で学位を取得した「くじら博士」でもある。

本書における同氏の主張は、2度にわたって南極海の鯨類調査に参加した経験にもとづくものであり、さらに衆議院議員として国際捕鯨委員会（IWC）に参加した経験にもとづくもので、単なる机上の空論ではない。

IWCの場で捕鯨反対派にいじめられている小さな海洋国家のためにも、世界の持続的な食料確保のためにも、日本は科学的な理論にもとづいて捕鯨の正当性を主張し、闘わなければならないと説いているのである。

人類がくじらを含めた他の生き物を愛しみ、無駄な殺生をしてはならないことは当然のことであるが、意図的に誤解をばらまく反捕鯨派の感傷が人類の持続的生存を保障しないだけでなく、クジラ類の未来にとっても益することがないことを本書は明快に説いている。必読の猛書である。